

皆生温泉ふるさと伝承 ～海に湯が湧き一世紀～

1. 有本松太郎ものがたり・・皆生温泉の生みの親

<有本松太郎氏の思い>

☑ 伝承者 遠藤功德氏：「皆生温泉土地株式会社 35 周年史」

- ✓ 砂浜の荒蕪地にあつて、ともすれば波に洗われていた価値もない一温泉を、当時としては全く夢にも等しい大企画を以て、百年の大計を樹立、現在の如き殷盛の皆生温泉郷を実現せしめて、私達に、日夜限りない恩恵を与えている人こそ、故有本松太郎氏その人であります。(中略)私達は日夜その偉大なる温泉開発の先覚者を湯仰し、殊に温泉地帯の業者は共存共栄協調の和を以て、さらに一層の発展策を講じて、此の天恵の源泉を保護する事が、大恩人に報ゆる唯一の道であることを深く自覚せねばなりません。(後略)

- ・ この文章は、昭和 33 年 5 月 28 日皆生温泉土地株式会社の役員であつた遠藤功德氏が書いた当社の 35 周年史の序文の一説である。
- ・ 米子方面から皆生通りを進んでいくと皆生温泉の四条通りへとつながる。その突き当たり、遊歩道の真ん中に一つの胸像が建っている。皆生温泉の生みの親「有本松太郎氏」の胸像である。昭和 33 年 7 月に完成したこの像には当時の米子市長であつた野坂寛治氏による有本氏の業績をたたえる碑文が刻まれている。
- ・ 皆生通りは、米子と皆生間の輸送力を向上させるため有本氏が開発計画に盛り込んだ皆生電車の軌道が最初に敷かれた場所である。大正 14 年角盤町と皆生間に電車が開通し、大正 15 年になって県道米子 - 皆生線（皆生通り）が完成している。この道ができるまで皆生につながる道は、皆生通りの東側を通る車尾に抜ける道一本であつた。
- ・ 有本氏が皆生開発を手がけて第一歩である皆生通りの突きあたりに、有本像の置かれたことも何か感慨深いものがある。

- ・ 明治 33 年皆生の漁師たちによって発見された温泉であつたが、その後何人も人の手により温泉開発が試みられたようである。
- ・ 明治 44 年頃から福生村皆生の八幡市次郎氏が開発を手がけた。

☑ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35 周年史」

- ✓ 海岸にわらぶきの小屋を建て之に浴場二つ設け、一つはコンクリート造りの浴槽で営業用、後一つは木槽として、之は専ら村民の為に解放することとし、湯は汲み上げるようにして、その場所からほど近くの海岸に、旅館八幡館を建てて経営に当たつた。こうして作った浴槽も、日によって温度が異り、又荒れた日には波につかるなどという危険な状態で、温泉経営など到底及ばぬ幼稚な方法であつたが、八幡氏は何とかいろいろと方法を考えながらその経営を続けていた。

- ・ 当時から海との戦いが始まっていたことを伺わせる。八幡氏は相当な私財を投入して温泉開発に取り組んだようである。その状況を見るに見かねて、当時米子に居を構えていた有本松太郎氏が、八幡氏の志を引き継ぎ、温泉開発を手がけることとなつた。

- ・ 大正9年6月有本氏は、遠大な計画を元に皆生温泉開発をはじめた
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 荒蕪の海岸の地を拓いて一大温泉郷とし社会奉仕とともに、地方発展に供するという理想を説き同志を募って東奔西走した。
 - ✓ この計画は要約すると次の通りである
 - 1.温泉を安全地帯に開発するとともに集中配湯
 - 2.広大な都市計画のためのあたり一帯の土地買収及び本格的な都市計画
 - 3.既存都市米子町及び米子駅連絡の交通計画
- ・ その後も次々と温泉開発への準備を進めていった。
- ・ 大正9年9月海中調査を実施し、数力所から温泉が湧出していることを確認した。
- ・ 同年11月旧藩主池田氏より門脇茂雄氏に払い下げられた約15町歩（15ヘクタール）の土地を買収した。この地は、三条から西側の現在皆生温泉街の中心地となっているところである。
- ・ 大正10年1月海岸砂地一帯の約8町歩を町所有の温泉の権利とともに買収した。その後、その手続きについて紛争があったようであるが、現在はそのほとんどが海中に沈んでいるという。最終的に民有地約16町、村有地約8町、合計約24町（240,946㎡）の買収に成功した。

< 100年前の壮大な都市計画 >

- ・ 大正13年3月 有本氏の皆生温泉街への思いは、専門家折下技師により「皆生温泉市街地区画設計図」として現実のものとなった。現在でもこの設計図の原本は、皆生温泉観光株式会社に大切に保管されているという。この設計図は、当時メインストリートであった三条通り（車尾 - 皆生線）を中心に描かれている。
- ・ 東西に三条通りを中心として東に一条・二条通り、西に四条・五条通り、そして南北には海岸側から一丁目・二丁目・三丁目・四丁目までの通りを作り、その一区画は千坪ずつに区切られていた。市街地は、商店街、住宅街、別荘地帯、旅館街に区分けされていて、学校、銀行、劇場、運動場、野球場、郵便局、公園などの公共施設なども配置されていた。京都の町並みを模して設計されたとも言われている。
- ・ 現在の皆生温泉を見てみると、交通の中心は四条通り（皆生通り）に移っているものの、当時の区画がほぼ同じように再現されている。特に、三条通りの幅員は当時のままと言うが、20m以上あり今見てもかなり広く感じる。
- ・ この設計図ができたころ、まだ手つかずの松林が広がっていた皆生の地に、このような壮大な一大観光都市を誰が想像しただろうか。また、そのイメージが100年以上経った現代にそのまま受け継がれていることに驚きを感じる。
- ・ 有本松太郎氏の想像力と先見性に感嘆の一言である。
- ・ 有本氏は公共のサービスについても充実に尽力した。米子 皆生間をつないだ皆生電車についてはよく知られているが、電車開業までの交通手段を確保するために、フォード製の12人乗り幌型自動車を車尾経由で運行させていた。

- ・ 大正 12 年 2 月に電話が開通しているが、米子から皆生ままでの架設費用を負担することを条件として交渉したようである。
- ・ 同年 6 月派出所ができているが、当時この建物も建設している。
- ・ 大正 13 年 7 月郵便局も開局の運びとなったが、皆生温泉街の利便性を考えて三条通りの中心に設置された。初代郵便局長は有本松太郎氏が就任し、建物や郵便局の維持費も負担していたという。

< 山陰線と共に米子にやってきた偉人 >

☑ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35 周年史」

- ✓ 有本氏は文久 3 年（1863 年）1 月 7 日、兵庫県美方郡浜坂町柘谷に有本莊三郎氏の次男として生まれ。浜坂小学校卒業後、遠く長野県庁に奉職していた。その後、土木建設の会社に入社したが、志を立てて独立して有本組を組織した。
- ✓ 明治 19 年各地で河川が氾濫し日野川でも東八幡の堤防が決壊した、その復旧工事を請け負ってこの山陰にやってきた。その後、朝鮮に渡って朝鮮鉄道の工事にたずさわったこともあった。続いて始まった山陰線の新設工事には、名古屋の古川組の下請けとして活躍した。その後東海道線浜松 静岡間の複線工事にたずさわって、当時にしては相当の財を得て帰ってきたという。

- ・ 皆生温泉でみやげ物屋を営む藤田氏は、母親が有本さんの姪に当たる親戚である。

☑ 伝承者 藤田信康氏：

- ✓ 有本さんは皆生温泉を開発する前は、土木請負業をしておられた。
- ✓ 山陰線の工事をするために米子に来られたと聞いている。餘部鉄橋の図面や山陰線の倉吉付近の設計図をご自宅で見せてもらったことがあると語る。
- ✓ 東町の錦織眼科の辺りに家があった。皆生温泉を開業する大正 10 年頃、自宅の離れに 7～10 人ぐらいの書生を住まわせており、当時としては珍しい工業科のあった、米子工業高校に通わせていたという。

- ・ 大正 7 年 1 月有本氏は、鳥取県議会議員に初当選を果たした。土木請負業を譲り、県行政に専念したという。
- ・ 大正 12 年 9 月まで鳥取県議会議員を務めたが、その間皆生温泉土地株式会社の設立、米子電車軌道株式会社などの地元住民の生活向上のために様々な活動をした。

< 住民、企業、行政が一体となった成果 >

- ・ 偉大なリーダー有本松太郎氏の出現により、皆生温泉の開発のスピードが早まったことは間違いないが、地域住民や行政の力も見逃すことはできない。
- ・ 皆生温泉土地株式会社設立当初の株主名簿には、有本松太郎氏をはじめ 100 人を越える地元の出資者が名前を連ねている。また、村有地の売却においても地元を発展させるという大きな意志が感じられる。

- ・皆生温泉旅館組合の組合長を務める柴野氏によると。
- ☑ 伝承者 柴野憲史氏：
 - ✓ 曾祖父にあたる柴野勘太郎さんが大正 12 年眞寿屋と言う旅館を営んでいた。
 - ✓ 勘太郎さんは大正 10 年皆生温泉土地株式会社設立時の株主にも名を連ねており、一号泉の前で取られた写真にも写っているという。
- ・ 大正 10 年頃取られたその写真には一号泉を掘削した櫓をバックに、十数人の男たちが誇らしげに写っている。柴野さんのような地元の人たちも含まれていたのであろう。
- ・ 有本氏が手がけた最初の泉源は、三条通りの突き当たり、当時の波打ち際より少し陸に上がったところであったという。（現在は防波堤より約 60mの海中に位置している）
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 大正 10 年 7 月 31 日掘削に着手、工事は快調に進み、同年 11 月 5 日竣工引き渡しになった。深さ 36m、湧出量 240 立米 / 1 分、温度 72 度の優秀な温泉だった。
- ・ その後、多くの旅館が開業し、折しも大正の華やかな時代を迎え皆生温泉も大いに賑わった。温泉給配所の完成、温泉市街地工事完成、温泉電車開通など皆生温泉にとっては大いに盛り上がった時代である。
- ・ 時代が昭和に変わるころから“不況の波”が押し寄せてきた。大型旅館が相次いで休業するなど温泉会社の収入も大きな影響を受けた。温泉の配給も夏には余り冬には不足するという状況が続いていたため、安定的な供給体制を望む声が上がっていた。
- ・ そこで、温泉の開発を一時村営化するなど万策が講じられたが、その状況に追い打ちをかけたのが“海の波”であった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 7 年 2 月 18 日の暴風による大波浪は大山館の前まで浸水し、泉源機械室もまた被害を受けて送湯が止まった、3 月になって復旧した。
 - ✓ 昭和 8 年 10 月 19 日初めて海岸海蝕の言葉が記録された。この時、一号泉は危殆に瀕し、村、組合及び会社が三位一体となって懸命に防護作業に努めてどうやら事なきを得た。
- ・ 昭和 9 年 10 月 15 日有本松太郎氏は辞任し、皆生温泉開発の夢は坂内義雄氏へと引き継がれていった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 10 年 9 月 25、26 日の波浪は、一号泉を飲み込み、湯溜りタンクを倒壊させ泉井は砂の中に埋没した。直ちに全力をあげて復旧したが、一号泉はよみがえらなかつた。
- ・ 時を前後して、皆生温泉の創世期を支えてきた有本松太郎氏、そして記念すべき第一号泉が思い半ばにして、温泉開発の第一線から退くこととなった。

- ☑ 伝承者 藤田信康氏：
 - ✓ 晩年、有本氏は皆生温泉の自宅に住んでおられた。伝承者（昭和4年生まれ）の小さいころは、すでに家の中で過ごしておられ、あまり顔を見たことがなかった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉土地株式会社：「35周年史」
 - ✓ 皆生温泉も浸蝕のために絶えず一喜、一憂の状態を呈しつつ、ついに内陸鑿泉の成功によって、現在の如く急速の発展と促し得たのであるけれども、氏の歩んだ本社創業時代から昭和初期に於ては、全く犠牲的苦行時代とも言い得よう。
 - ✓ 有本氏は昭和16年5月13日、現在の盛時を見ることなく皆生の家に於て79才の高齢を以て卒去した。

<皆生電車>

- ・ 有本氏の功績として忘れてはならないのが、米子 皆生間を結んでいた皆生電車ではないだろうか。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 有本氏は皆生通り建設に便乗して、米子皆生間の電车道建設を企画した。過去の鉄道建設の経験から、当時米子 皆生間の交通機関は、電車が最も手っ取り早く確実だと考えたのだろう。
 - ✓ 大正14年4月1日米子町角盤町を起点とし、皆生温泉四条通り公園西側までだった。中古のいわゆるちんちん電車であったが、当時としては頼もしい交通機関であった。大正15年1月米子市角盤町から灘町回りで米子駅まで開通した。
- ・ 昭和初期の風情を感じさせるのが皆生温泉の入り口となった電車の停留所である。
- ・ 昭和2年皆生温泉の玄関である電車の停留所が完成した。松林の中に立つ停留所はよき時代の皆生温泉を彷彿とさせる。
- ・ 昭和3年1月米子の中心街を抜ける中央線が開通した。市街地の買収が難航したためであった。



昭和初期の皆生電車と皆生温泉駅
写真提供 藤田収康氏

- ☑ 伝承者 皆生温泉開発60周年記念誌：「皆生今昔」
 - ✓ 当時は、ちんちん電車で至極のんびりだったのだが、有本翁のカンは的中、京阪神からやってくる“だんさん”たちは大喜び。ガメつくもうけ、気前よく使う - 京阪神の“だんさん”たちも「乗り心地のよい電車が一番でおます」というわけだ。

- ・ この皆生電車は、様々な人の思い出に残っているようである。
- ・ 皆生温泉で酒屋を経営する松浦氏（昭和4年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ 小学校6年生のときに廃止になったと思う。一日に数本電車が出ていたが、地元の人はほとんど乗っていなかった。冬になると客車の中に電熱ストーブのようなものがあり、珍しくて乗ったのを覚えている。
 - ✓ 電車道に平行してあぜ道があり、その道を福生小学校に通った。学校の行き帰りに皆生電車をよく見送ったものであった。

- ・ 昭和12年頃、九州から引っ越してきた森野氏（昭和4年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 森野氏は子どもの頃、からだが弱く電車で米子の病院に行っていた。角盤町の辺で降りていたと思う。子どもの遊びとして線路にボタンを置いて潰したり、線路に耳を当て電車の近づく音を聞いたものであった。

- ・ 当時、加茂町に住んでいた木田氏（昭和7年生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 木田達二氏：
 - ✓ 皆生電車も覚えている、石ころを線路において遊んだりした。まだそのころは加茂町の道は泥道であった。駅前の日興証券の辺が終点であったと思う。
 - ✓ 近くのおばさんが競馬に行くので電車に乗ってついていった。米子は市内電車があるなんてたいしたものだと思っていた。

- ・ 皆生温泉旅館組合の元理事長である岩佐氏（大正13生まれ）によると。
 - ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 画期的な都市計画事業だと思う。皆生から米子まで直線で道がついている。当時、田んぼの仕切りに沿って道路をつけるのが普通であったはず。
 - ✓ 乗り手が少なくて廃止になってしまったと思う。その後、満州鉄道として売られていった。満州国建国に際して必要であったが作る暇がなかったのだと語る。

- ☑ 伝承者 藤田収康氏：昭和8年生まれ
 - ✓ 駅舎は終戦まで、その後はバス停として利用された。野坂さんという運転手が駅舎に泊まり込んでいた。終バスを運転して戻り、始発バスを運転して出かける。
 - ✓ 古い駅舎を改造して社宅のように住んでおられた。

- ・ 昭和12年米子国際飛行場が開場し、物資の輸送のため皆生電車の軌道が邪魔になった。
- ・ 昭和13年11月27日軍の命により皆生電車は運行を終え、翌月中には撤去された。
- ☑ 伝承者藤田収康氏：
 - ✓ 戦時中、三柳の米子国際飛行場から飛行機を修理するために、皆生の松林まで飛行機を引っ張ってきていた。そのために電車の架線が邪魔になったのではないか。

2. 坂内義雄 ものがたり・・・皆生温泉の育ての親

<皆生温泉の復活>

- ・ 有本松太郎氏が皆生温泉の生みの親とするならば、坂内義雄氏は皆生温泉の育ての親ではないだろうか。昭和9年10月資金的に行き詰まっていた、皆生温泉の泉源開発事業を引き継いだのが坂内義雄氏である。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 京都市に在住し、日本証券株式会社、九州電気株式会社などの社長を務め財界の有力者であった。坂内氏は、当時のお金で30万円を増資するとともに、株式の過半数を得て経営権を持った。
- ・ 坂内義雄氏は、数多くの会社の役員を務めていたため、小村雄三氏を代弁者として社長に据え、次の二つの事業に取りかかった。
 - ✓ 新泉四号泉の開発
 - ✓ 娯楽センター「温泉クラブ」の建設
- ・ 昭和10年9月の波浪で一号泉が失われていたため、使える泉源は三号泉だけであった。そのため朝5時から9時まで、夕方は4時から9時までの時間配湯となっていた。
- ・ 昭和11年4月新泉4号泉を掘り当て、7ヶ月ぶりに時間配湯が解除された。しかし、この泉源は湯量も温度も満足いくものではなかったため、埋没した一号泉の内側10mぐらいのところで新泉開発を進めた。昭和11年8月有望な新泉の掘削に成功した。
- ・ この成功により皆生温泉始まって以来の24時間配湯が実現した。
- ・ 皆生温泉には、中心となる娯楽施設がなかった。会社はこのため「温泉クラブ」の建設を企画した。昭和11年5月三条通りの郵便局の海側に温泉クラブは完成した。大浴場、食堂、売店、休憩室、家族風呂などのほか、玉突き場などもある娯楽施設としてオープンした。折からの景気の好転もあって皆生温泉は活気を取り戻した。
- ・ 昭和12年の夏には会社は、海水浴場を始め、砂風呂を作り売店を出した。

<坂内義雄氏の素顔>

- ・ 坂内義雄氏の話を知ると、みんな口をそろえて忙しい方だったの答えが返ってくる。
- ・ 皆生温泉観光で泉源の管理をしていた森野氏によると。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 多忙であったため皆生には株主総会の時ぐらいしか来られなかった。当時坂内社長は、鉄鋼・硝子・温泉事業など約60社の会社と関係があり、分刻みのスケジュールであった。
 - ✓ 驚くほど発想も豊かであった。温泉の塩分で鉄がさびて困っていると聞いた坂内氏は、「鉄がダメなら真鍮で作ってみては」との提案をして下さった。自分たちには思ってもよらない発想であり、感心したことを覚えている。

- ・ 皆生温泉観光に勤務していた手島氏によると。
- ☑ 伝承者 手島孝氏：
 - ✓ とにかく耳の大きい方であったことを覚えているという。
 - ✓ 葬儀に参列したときのことを鮮明に覚えている。とにかく大きな葬儀であった。財界はもちろん、政治家や皇族の方まで参列されていた。ほとんどの参列者がモーニング姿であり、普通の礼服を着ていたのは伝承者だけだったので恥ずかしい思いをしたという。礼服の人がいたと思ったら新聞記者であった。(笑う)
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 坂内義雄氏を米子駅に見送りに行った時の話である。
 - ✓ いきなり駅長室に通されてびっくりしたことを覚えているという。
- ・ 当時、かなりの経済力や人脈を持っておられたようである
- ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 坂内義雄氏は、とにかく松を切るなど言われていた。
 - ✓ 皆生温泉の良さは松林であることをしっかりと認識しておられた。今、皆生温泉の風情がなくなったのも、松林がなくなってしまったことも一つの原因である。

< 公衆浴場公園温泉 >

- ・ 皆生温泉には、開湯当時から地元の人たちのための公衆浴場が整備されていた。
- ・ 皆生温泉に公園を設計する際に、温泉浴場を建設することとなり、大正 11 年 12 月公衆浴場公園浴場が完成した。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 一階には 30 人入り位の男女各々の並等浴室、少し小さな男女各特等浴室があり、二階は 30 畳敷きの休憩室となっていた。
 - ✓ 料金は並等入浴一回大人五銭、特等十銭で、休憩室は茶菓子付きで十銭であった。
- ・ 林の中に立つ公園温泉の写真が残っているが、当時としてはとてもモダンな建物であったようだ。
- ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ 皆生の住民や米子市内から多くの人が集まってきており、みんな坂内さんには感謝していた。銭湯みたいな感じで 2 階は無料休憩所みたいな感じとなっており、お弁当持参で半日くらい時間をつぶしている人もいた。
 - ✓ ヘルスランドの前身のような存在である。

<ヘルスランド>

- ・ 昭和 34 年 4 月皆生温泉の真ん中に現れたのがヘルスランドである。
- ・ 当時、戦後から高度経済成長へと向かう時期であり、一般の人も旅行に行くようになってきた。特に、農協が企画する団体旅行や職場の慰安旅行などが急激に増えた時期であった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 営業の概要は、入湯料大人 100 円、子ども 50 円、家族湯 45 分 5 人まで 100 円、貸室半日 6 畳 1 室 250 円、食堂は食券により販売、売店は現金販売、来館客は入湯料により入湯券を求めることにより入場できる。
 - ✓ 館内では自由に入浴ができるとともに、演芸場では演芸を見ながら休憩できる。その他デラックスな館内施設を適宜利用できる。ヘルスランドは、開館とともに近郊の団体客で意外にも賑わい、玄関前には連日貸し切りバスが数台並んでいた。
- ☑ 伝承者 藤田収康氏：
 - ✓ とにかくすごい人であった。町内会、農協などの団体が主で、各地から貸切バスで乗り付けてきた。泥落としの時期（田植えの後）に新見などから美保の関へ観光に行き、帰りにヘルスランドでご飯を食べるコースが一般的であった。
 - ✓ 地元の方は、日帰りのリクリエーションの場として親しまれた。温泉につかり、演芸を見ながら食事ができる。ゆっくりと一日を過ごせる場所であった。
- ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ とにかくすごいお客様だった。県内はもとより、広島、岡山などから団体客がバスで乗りつけた。お酒の納入業者としても大忙しであった。

<OUランド>

- ・ 昭和 54 年ヘルスランドの営業を引き継ぎ、温泉クラブの跡地にできた公衆浴場が開業した。この時、皆生温泉で温泉に入れる公衆浴場は、この公衆浴場と岡本氏が公園温泉の営業を引き継いでいた公衆浴場の二軒であった。
- ・ その公園温泉も昭和 60 年頃には営業を終えた。
- ・ ヘルスランドの解体から 14 年後の平成 12 年OUランドはオープンした。ヘルスランドのような娯楽施設を再び皆生に復活させるといふ思いから作られたものだという。
- ・ 皆生温泉観光の社長を務める坂内氏によると。
- ☑ 伝承者 坂内和孝氏：
 - ✓ 先代が亡くなる前にヘルスランドに替わる施設を皆生に作りたいとの思いを聞いていた。非常に厳しい状況であったが、先代の言葉が耳に残り計画に着手した。
 - ✓ 平成 8 年から建設計画に着手したが、試行錯誤の連続であった。地元の人に喜んでもらうために何ができるのか。ヘルスランドを今の時代によみがえらせるためにはどうすればよいのか。各地の温泉施設を視察したりして構想を練って、2 年後の平成 10 年にやっと実施計画が出来上がり工事にかかったと語る。

<海嘯（かいしょう）との戦い>

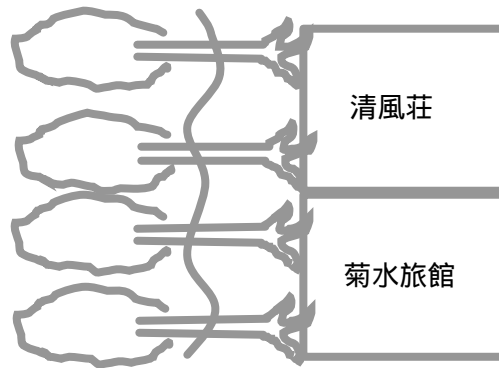
- ・ 皆生温泉は“海に湯が沸く皆生温泉”の名の通り、海からわき出した温泉であり、泉源の多くが海岸近くに位置している。開湯当時から温泉の泉源開発の現場では、多くの苦労があったようだ。特に、昭和10年前後から海岸の浸食が激しくなり、皆生温泉はたびたび海の恐怖にさらされるようになった。
- ・ 当時、海の浸食は温泉旅館のみならず、地元住民たちにとっても大いなる驚異であり、地域一丸となって海と戦っていた。

☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ 昭和15年9月の大波浪浸食は岩佐旅館、菊水旅館の建物を流出の危機にさらした。
- ✓ この時、陸軍病院の衛生兵をはじめ福生、福米、車尾の警防団が出動し、折から滞在していた大刀洗航空隊員らも協力して土嚢、河馬、松枝などを組んで防護に務めた。

☑ 伝承者 松浦茂氏：

- ✓ あの時の大波浪は鮮明に覚えている。岩佐旅館と菊水旅館の座の下まで波が押し寄せてきた。皆生の住民が総動員して旅館の流出を食い止めた。近くの松林の松を根っこごと抜いてくる。そして、旅館の座の下に根っこのほうから突っ込んだ。
- ✓ 旅館は吹き出しをして住民の好意にこたえたという。



☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ 昭和16年12月13～15日の大海嘯は金波楼以東の砂浜を30mも決潰後退させ、金波楼、金魚亭のコンクリート塀も流失した。
- ✓ 昭和17年2月5日の大波浪浸食は、ついに海岸旅館の金魚亭の一部を流出させた。

3. 皆生温泉泉源守 ものがたり

< 皆生温泉泉源守 >

- ・ 大正 13 年 3 月皆生温泉では三号泉の開発に成功した。皆生温泉では、開業当初から温泉会社が泉源を開発・管理して、各旅館まで温泉を送り届ける役割を担っていた。
- ・ 三号泉の開発により、複数の泉源から温泉を集めてお湯を送り出す施設が必要となった。このために作られたのが温泉配給所である。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 大正 13 年 9 月三条通りの突き当たり、海岸通との内側コーナーに二階建ての配給用貯湯タンクが完成した。高さ 10m、建坪 7 坪半の直方体のコンクリート建築で、二階部分が容量 2 百万石の大貯湯槽となり、一階が機械室にあてられた。
 - ✓ このタンクの南側に続けて看守宅が建てられ、後にそこは売店となった。
- ・ まさに、この配給用貯湯タンクと看守宅（以下、伝承者たちの呼称である「源泉ポンプ小屋」と言う）が源泉守ものがたりの舞台となる。

= 第一代泉源守 藤田幸太郎 =

- ・ 第一代目の泉源守は、藤田幸太郎氏である。幸太郎さんは、有本松太郎さんと同郷の兵庫県浜坂の出身である。妻である「ゑつ」さんは、有本松太郎さんの親戚にあたる。
- ・ 皆生温泉に来る前、幸太郎さんは神戸の造船会社に勤務しており、夫婦は神戸に住んでいた。大正 10 年頃、一号泉の開発に成功し、その温泉を汲み上げるために発動機を設置したが、発動機を動かすために免許を持った人が必要であった。そこで、有本松太郎さんが藤田夫妻を皆生の地に呼び寄せ、発動機の管理を幸太郎さんに任せた。
- ・ 幸太郎さんとゑつさんの長男で、皆生温泉でたばこと土産物店を営む藤田収康さんが当時の様子を語る。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 大正 11 年頃に両親は皆生温泉へとやってきた。
- ✓ 大正 13 年 9 月源泉ポンプ小屋が完成すると、両親は住み込みで管理にあたった。その後 1~2 年後に源泉ポンプ小屋の住居部分を改造して土産店をはじめたという。



昭和初期の源泉ポンプ小屋
 右手奥：幸太郎氏 その手前：ゑつ氏
 写真提供 藤田収康氏

- ・ 昭和初年頃、藤田夫婦がはじめた土産物店が、現在も皆生温泉で営業を続けている藤田商店の始まりである。伝承者藤田収康氏は、昭和 8 年生まれであり、源泉ポンプ小屋で生活したことをあまり覚えていないという。両親から聞いた話によると。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 冬になり海が荒れると、発動機が故障する。お客様がいるのにお湯が出なくなるので旅館から叱られた。また、冬になると温泉が上がらないこともあった。
 - ✓ 配管の管理なども全て行っており、今でいうと水道工事業業者のような仕事もしていた。今のように配管の材質も良くないので、塩泉のため鉄がさびてお湯漏れなども頻繁に起こった。皆生中をあっちに行ったり、こっちに行ったりして、土を掘り返してパイプをつないだという。
- ・ その頃から皆生温泉の道路の下に配湯するためのパイプが張り巡らしてあった(現在でも道路の下に配管が通っている)藤田収康氏が子どもの頃は、道が舗装してなく砂利道であり、雪が降ると温泉の通るパイプの上だけ温泉の熱で雪が積もらなかった、その道を学校に向かって歩いていったそうだ。
 - ・ 泉源の管理は、とにかく大変な仕事であった。幸太郎氏は、重労働のため足が悪くなり泉源の管理を続けることができなかった。そのため泉源の管理を二代目の岡本氏へと仕事を引き継いだ。現在、藤田商店がある場所に引っ越し、土産物店に専念することになった。

<戦前の皆生温泉>

- ・ 4才ぐらいまで泉源ポンプ小屋で暮らした伝承者は、当時を振り返る。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 子どものころは砂浜がまだまだあった。
 - ✓ ポンプ小屋から薬師堂まで 100m位の距離があり、波打ち際まではまだかなりの距離があった。夏になると、砂浜が熱くなるので海岸まで裸足では行けなかった。
- ・ 冬になると砂浜がドンドンとられていった。御来屋の方から大きな石を運んできて防波堤にしていた。昭和 15 年頃海岸沿いの旅館が脅かされていた時、波にえぐられ壁などが落ちて流されるのを見た覚えがあると語る。
 - ・ 昭和 11 年頃藤田幸太郎さんは、皆生温泉の三条通りに土産物店を構えた。当時、戦時色が強くなってきており生活は厳しかったようである。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 昭和 12 年陸軍の転地療養所が皆生に置かれた。各旅館に傷病兵が泊まるようになり、皆生温泉の旅館が潤った。
 - ✓ 一方、土産物屋の方は、配給制になり売るものもなく、お客様もいなかった。お母さんは傷病兵で賑わう旅館の手伝いに出ており、お父さんも米子へ勤めに出ていて、お店の方は開店休業の状態であった。
- ・ そのころ小学生であった藤田収康氏は、旅館で療養をする傷病兵と釣りをしたり、写真を撮ってもらったりして遊んだという。

<戦後の皆生温泉>

- ・ 皆生温泉の創生期を支えてきた藤田幸太郎氏は昭和 28 年に他界された。
- ・ 折しも日本は高度経済成長に向かう上り坂にいた。このころ皆生温泉でも、白扇、松露園、ひさご家など多くの旅館が開業している。幸太郎氏の長男である収康氏は、父親の後を引き継いで藤田商店を営することとなった。
- ・ 昭和 34 年ヘルスランドが開業すると皆生温泉にお客様がどっと押し寄せてきた。当時の皆生温泉は、旅館街の中にまで定期バスが入っていた。皆生通りから四条通りに入り、吐月堂の前に四条のバス停があった。そして三条通りの方に回り込み、藤田商店の前に三条のバス停があった。
- ・ ヘルスランドを利用するお客様はすべて藤田商店の前のバス停で降りた。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ ヘルスランドが出来てから商売が繁盛してきた。夏時分になるとアイスクリームを売っていたが、30～40本ずつ運んでくるのだが運ぶのが間に合わないぐらいのスピードで売れていった。
- ✓ 当時は、生姜煎餅やボウフウ煎餅などを売っていたと思う。吐月堂で作っていた饅頭も売っていたと思う。とにかく何を置いても売れたことを覚えている。



戦後の三条通り 藤田商店
写真提供 藤田収康氏

- ・ 藤田氏は昔を振り返り、両親の世代は大変な苦勞をして皆生温泉を作り上げてきた。皆生温泉が良くなる前にこの世を去ってしまった。せめてお客様であふれる皆生温泉を見せてやりたかったと語る。

= 第二代泉源守 岡本与一 =

- ・ 藤田幸太郎氏から温泉配給タンクの管理を引き継いだのが岡本与一氏である。岡本氏がいつ頃まで源泉の管理をされていたか定かではない。
- ・ その後、三代目の森野政喜氏により源泉の管理が引き継がれている。

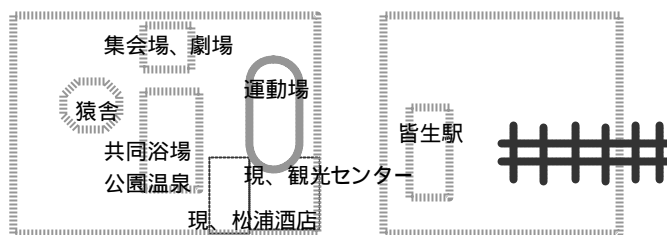
<皆生の温泉公園>

- ・ 岡本氏は源泉の管理をする傍ら、「公園温泉」の管理も任されていたようである。この「公園温泉」のあった公園（温泉公園）が当時の皆生の人々にとっては、ちょっとした自慢であったようだ。
- ・ 皆生でお菓子の製造販売をしていた内田氏によると。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ 温泉公園には、岡本さんが経営していた共同浴場があった。集会場みたいな建物がありそこでは映画が上映されていた。猿の檻や遊具などもあったと思う。

- ✓ 昭和 4~5 年頃、現在の観光センターのあたりに運動場があり、大人たちがユニホームをそろえて野球をしていた。旅館の旦那さんや検番の人たちであったのである。当時としては、とてもハイカラな感じであったという。



☑ 伝承者：松浦茂

- ✓ 温泉公園には、猿の檻があった。木馬やブランコなどの遊具があり、学校から帰ってきてよく遊んだ。何もない時代であったので一番の楽しみであった。

< 公衆浴場公園温泉 >

- ・ 「公園温泉」は、戦後営業を一時中断していた。昭和 30 年 12 月岡本氏は、公園の三条通りを挟んだ東側で「公衆浴場公園温泉」の営業を再開した。大正時代に建てられた「公園温泉」の二階部分を移築して建てられたものであったという。
- ・ その後、昭和 60 年頃まで営業を続け、皆生温泉の人たちを癒す場として愛され続けた。

< 皆生温泉の足 >

- ・ 岡本氏が、戦後しばらく皆生温泉と米子駅の間を結ぶ足として、貸し切り馬車を運行していた。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 戦後、石油が不足しており皆生 米子間には木炭バスが走っていたが、便数も少なく大変不便であった。少しの間であったと思うが、公衆浴場の岡本さんが貸し切りの馬車を走らせておられた。
- ・ 当時の写真を見せてもらおうと、グラウンドの東側に「貸切馬車」文字が写っている。バスも不便でタクシーもない時代に、お客様の足として馬車が活躍していたようである。
- ・ また、この時期にお客様を乗せる自転車が走っていた。コウセイ社の村川さんという方がやっていたようであるが、今でも中国や東南アジアなどで見られるような自転車にお客様を乗せて運ぶようなスタイルであったという。

= 第三代泉源守 森野政喜 =

- ・ 森野政喜氏は、九州の熊本県出身であった。坂内義雄氏の戦友であった関係で、昭和 12~13 年頃家族で熊本から皆生温泉の地にやってきた。
- ・ 森野政喜氏の息子で後を引き継ぎ皆生温泉の泉源を守り続けた森野寿夫氏によると。

☑ 伝承者 森野寿夫氏：

- ✓ 坂内さんの関係で皆生温泉に来て温泉の管理をするようになった。
- ✓ 初めは源泉ポンプ小屋では生活していなかった。藤田さん、岡本さんの後を引き継いで温泉配給タンクの管理を任された。

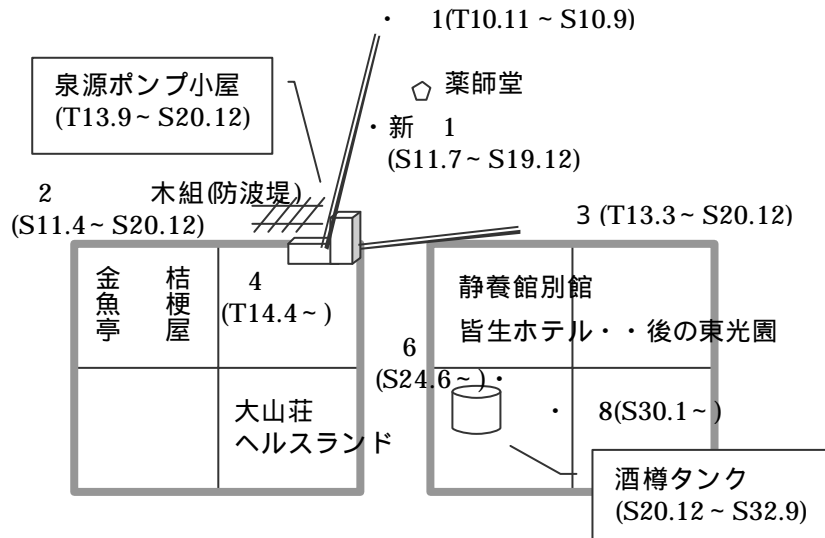
- ・ パイプの修理は時を選ばず、正月返上で修理をした。当時鉄のパイプを利用していたため、錆がでて傷みが激しかった。修理するにも、ボルトがさびて修理できない状況であった。当時は時間給等であり夜に作業していた。温泉に関しては森野政喜氏と、当時役員であった木村氏が一手に引き受けており、手が足りないときは、地元の人に人夫を頼んでいた。そのころは、旅館も協力的であり炊き出しなどをしてくれていたようだ。
- ・ 資材などが足りないときの応急修理として、配管に昆布を巻いたりした。昆布にお湯がしみるとヌメリがでてきて漏湯が止まるのだという。

< 源泉ポンプ小屋 >

- ・ 大正 13 年 9 月にできた源泉ポンプ小屋は、三代の泉源守とその家族によって支えられてきた。海辺にそびえ立つ三階建ての建物で、当時としては大変目立っていたのではないだろうか。海から湧きだしてくる温泉をタンクに集め各旅館に配る重要な役割を果たしてきた。いわば、皆生温泉の心臓的な役割を担っていた。
- ・ そこには多くの思い出があるようである。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 昭和 11 年頃までこのポンプ小屋に住んでいたが、3~4 才ぐらいであったため当時の記憶はない。小学校の頃（昭和 17~19 年）遊びに行ったことは覚えている。
 - ✓ その頃は森野さんがポンプ小屋の番をしておられたと思う。
 - ✓ 学校から帰って屋上で遊んでいた。三階建ての建物の屋上で手すりもなかった。とにかく怖かったことを覚えている。
- ・ 戦時中、海水浴をしていて、ポンプ小屋の先の海岸を掘ると暖かい水がでてきた。寒いときは、暖かい砂をかけて砂風呂などをしていた。壊れた泉源から温泉が漏れていたのかもしれないという。
 - ・ ポンプ小屋には源泉管理のための地下室があった。その地下室から 3 号線までトンネルがあり、その中を通して遊んだものであった。現在でもなぎさ園の沖合に見えることがあるという。



< 源泉ポンプ小屋倒壊 >

- ・ 昭和 15 年には岩佐旅館など海辺の旅館が流出の危機にさらされ、昭和 17 年にはついに海岸旅館の金魚亭の一部が流出した。徐々に海岸の浸食が進み、タンクは瀕死の状況にあった。森野氏の家族も以前はタンク小屋に暮らしていたが、その頃には危険となったため他で暮らしていたという。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ タンク小屋で生活している頃は、冬になると小屋の中まで波が入ってくることも多かった。ひどいときには一日に 4~5m 浜が取られてこともあった
 - ✓ 夏になると浜が 50m ぐらい復活していた。
- ・ ポンプ小屋の沖には木組みの防波堤が作っており、石などを入れて波を防いでいたが、ついにその時がやってきた。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 昭和 20 年 12 月 18 の海嘯は、ついに温泉供給の心臓部ともいえる配給タンクを倒壊させた。
 - ✓ 大正 13 年来源泉から汲み上げられた温泉を貯め、その高さで加圧して各需要家に送っていたもので、当時は二（新）、三、及び四号の各泉源が汲み上げられていた。その巨体は皆生温泉の象徴でもあったが、自然の力の前にあえなく跪いた。
- ・ この温泉配給タンクの倒壊により皆生温泉の送湯機能は一時完全に麻痺してしまった。
- ☑ 伝承者 手島孝氏：
 - ✓ 源泉を守るために木村勝三郎さんが先頭に立って海に飛び込み復旧に当たった。
 - ✓ 自分も海に入り、海中ではずれてしまっているパイプを必死でつないだ。
- ・ 当時、温泉会社の従業員であった手島氏、源泉の管理をしていた森野政喜氏、当時まだ入社していなかった森野寿夫氏なども海の中に入り温泉の復旧に勤めた。この時 4 号泉だけが掘り返され、代用の貯湯タンクにより細々と送湯が再開された。
- ・ しかし、不眠不休の作業で過労がたたリ、森野政喜氏がその後間もなく他界されたという。森野政喜氏の息子で当時 17 才であった森野寿夫氏は、当時を振り返る。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 源泉ポンプ小屋が海に取られる時は、とにかく夢中で手伝っていた。
 - ✓ 皆生温泉の思いでは、初めから苦しいことばかりであった。
- ・ 森野寿夫氏は、その 4 年後の昭和 24 年に温泉会社に入社することとなる。そして平成 10 年で退職するまでの約 50 年間にわたり皆生温泉の湯を守り続けた。
- ・ 森野寿夫氏に仕事をしていて一番楽しかったことはと問うと。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 昭和 24 年に六号泉が出たときはとにかく嬉しかった。
 - ✓ それまで温泉が足りないと、毎日毎日旅館から苦情をもらっていたが、これでやっと旅館から苦情を聞かなくてすむと思った。

< 6号泉と酒樽タンク >

- ・ 源泉ポンプ小屋倒壊の後、数年間皆生温泉は、波打ち際からわき上がる四号泉のみで温泉配給を続けていた。海の影響を受けない内陸に泉源を持つことが悲願であったが、掘削の失敗などが続きなかなか実現しなかった。
- ・ 昭和24年現在のなぎさ園の南側に、内陸では初めてとなる優秀な6号泉を掘り当てた。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 昭和24年6月26日午後8時は、まさに記念すべき皆生温泉復活の時であった。
 - ✓ 滾々と湧き出る高温の湯を目の当たりに見て、関係者一同には筆舌に尽くせぬ喜びがあったであろう。
- ・ 自噴する六号泉を前にした男たちが誇らしげに写真に写っている。
- ・ 六号泉という優秀な泉源を確保したものの、送湯の設備はまだ整ってはいなかった。戦後間もない時であり、物資がなく温泉を貯めるタンクを作ることができなかった。そこで思いついたのが、大きな酒樽をタンク代わりに使うことであった。
- ・ 昭和24年11月地上6～7mに設置された二つの酒樽タンクが完成した
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 酒樽をタンクにする発想は手島さんが思いついた。木村専務が懇意にしていた御車の深田酒造から、酒樽をもらい急ごしらえのタンクを作った。

< 海との闘い >

- ・ 内陸に泉源が確保され、泉源が海の脅威にさらられることはなくなったが、皆生温泉と海の戦いが終わったわけではなかった。
- ・ 昭和28年旅館の営業を再開した清風荘であったが、常に海の脅威にさらされていた。
- ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 昭和30年海が旅館の前まで迫ってきた。塀がぐらぐらになってもうダメかと思った。米俵に砂を詰めて土嚢がわりにして急場をしのいだ。米子市と交渉を続けていたが、一刻の猶予も許されぬ状況となり鳥取県に直談判したという。
- ・ 岩佐氏は、京都や東京の大学で学者を目指して長年研究をしていた。そこで培った人脈があり話はトントン拍子に進むこととなった。
- ・ 昭和31年10月1日応急工事代金として250万円の予算が付き、早速災害復旧工事に取りかかった。その日のことは今でも忘れずに覚えているという。
- ・ その年の11月に200万円の予算が付き、四条通りから清風荘にかけての海岸線に護岸防潮堤が着いた。その後、昭和36年までの間に、日野川の河口付近から現在のオーシャン付近までの約1,300mに及ぶ防潮堤が完成した。
- ・ 時は前後するが、昭和22年皆生海岸の浸食が進む中、鳥取県の事業として護岸工事が実施されている。海岸線から沖に向かい14基の突堤を造った。当初は、豆腐状のブロックを積み重ねたものであったが、砂地のため海に沈んでしまった。そこで、ブロックをコンクリートでかためて一定の効果は上がったが、結局突堤全体が海に沈んでしまった。現在でも海浜公園沖の海岸などにその面影を見ることができる。

< 皆生の救世主テトラポット >

- ・ 護岸防潮堤が完成した後も、暴風雨の波浪は防潮堤を乗り越えて、皆生温泉の温泉街にまで押し寄せた。
- ☑ 伝承者 藤田収康氏：
 - ✓ 波が店の前まで押し寄せてくることもあった。
 - ✓ 津波のように引く力がなく、なかなか海水が引かなかった。また、台風などの後には朝起きて道にでてみると海水が残っているようなこともあった。
- ・ このような状況を打開しようと、建設省によって考案されたのが離岸防潮堤である。現在でも、遊歩道の防波堤から約 100m沖に海岸線に平行して敷設されているのがその離岸堤である。4 本足のコンクリートの固まりであるテトラポットを積み重ねて作られた。沖に置かれた離岸堤の内側に砂浜がよみがえるトンボ口現象という効果も実験で実証されていた。昭和 46 年 8 月第一基目が清風荘の沖に敷設され、同年の 11 月頃にはすでに離岸堤の内側にトンボ口現象が現れたという。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ テトラポットは皆生温泉の救世主であった。
 - ✓ 今の皆生の人には海の怖さを知らない。大きな波が来ると河口の方でテトラポットが壊れることもあった。テトラポットが悪者のような言い方をするが、決してそうではない。もしもテトラポットがなければ今頃皆生温泉は存在していなかったはずだ。
- ・ 市議会議員として皆生の振興に尽くしてきた間瀬氏によると。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：
 - ✓ テトラポットの設置には、建設省の技官野坂氏など多くの人たちの一方ならない努力があって成し遂げられたものである。その功績を称えて野坂氏の碑が松月旅館の前に立てられている。
 - ✓ 救世主の出現で皆生温泉の浸食の歴史は終わった。テトラポットの出現は皆生温泉の大きなポイントであり、建設省には足を向けて寝られない。
- ・ このテトラポットの出現により明治時代に皆生温泉が開湯して以来、数十年続いてきた海との戦いに終止符が打たれた。振り返ってみると皆生温泉の開発の歴史は海との戦いの歴史ともいえる。八幡市次郎氏が手がけ、有本松太郎氏に引き継がれた温泉開発は、その後坂内氏がその意志を引き継いでいった。
- ・ 三代の泉源守をはじめ、現場で働く多くの人々やそれを支えた住民や行政の力によって今の皆生温泉ができあがったのである。

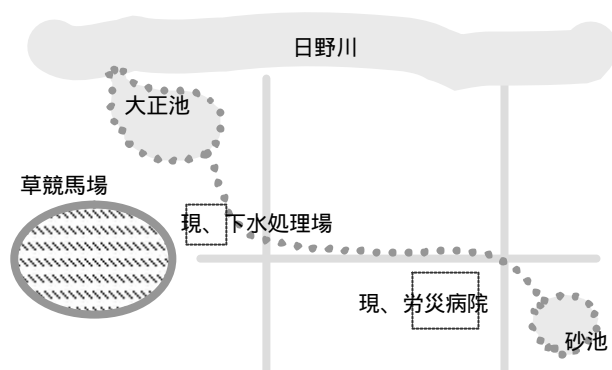
4. 輝きを放っていた戦前の皆生温泉

< 皆生にあった二つの競馬場 >

- 昭和の初期から戦後にかけて皆生温泉に競馬場があったことはよく知られているが、大正末期に皆生海岸で草競馬が行われていたことはあまり知られていない。皆生温泉で和菓子の製造販売店を経営していた内田政雄氏（大正9年生まれ）によると。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ 子どもの頃は、砂浜が200～300mあった。
- ✓ 海水浴をしていると海の中に温かいところがあった。砂を掘れば温泉がわいてきた。
- ✓ たぶん昭和初期だったと思うが、現在の下水処理場沖の砂浜で、草競馬をやっていたのを覚えている。



- 現在、下水処理場の海側は、すぐ海岸線が来ている。ここに競馬ができるほどの海岸があったとは想像も付かない。

- 当時の皆生温泉東部は、うっそうとした松林であり、河口付近には砂がたまり小高い丘になっていたという。
- 現在、ホックのあるところに直径20m位の池があり、砂池と呼んでいた。砂池には湧き水があり（大山の伏流水であろう）とても冷たい水が出ていたことを覚えている。
- この池から小さな小川が出ており、現在の労災病院の前、温泉公園の辺りを通り、日野川の河口付近にあった大正池にそそぎ込んでいた。その小川には小さなエビがいて、釣りの餌にしていた。大正池はかなり大きい池で、ボートなどが浮かんでいた。この大正池が日野川の河口へとつながっていたという。

- 昭和に入り現在の皆生海浜公園の辺りに競馬場が作られた。昭和4年5月第一回目の皆生競馬が開催された。

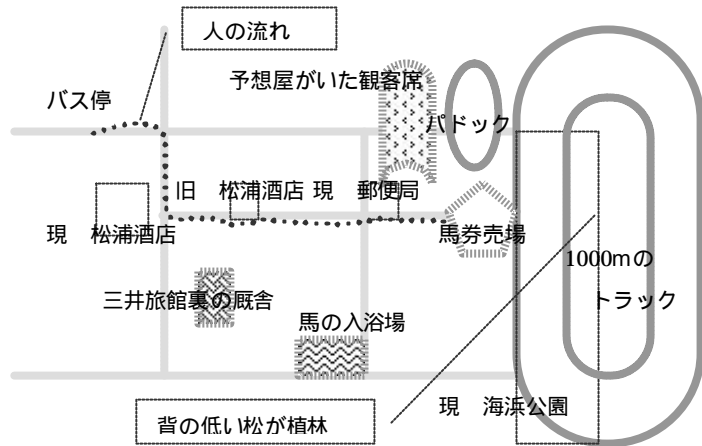
☑ 伝承者 松浦茂氏：

- ✓ 昭和12年頃皆生競馬は年に5～6回あったと思う。競馬の期間中は、大変にぎやかで露天商なども出ていて朝日町のような状況であった。
- ✓ 当時の古い店舗は競馬場へ続くメインストリート沿いにあった。バス停留所にバスが来ると、店の前を通って正面の馬券売場へと人が流れた。競馬のお客様を目当てに出来た旅館もあった。競馬で温泉街がにぎわったことは確かであった。
- ✓ 勝てば飲む、負ければ飲む、そして酒屋も潤った時代。
- ✓ 検番なども隆盛になり、皆生温泉が繁栄する基礎を作ったのではないだろうか。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ 現在の郵便局の辺が小高い丘ようになっており観客席があった。
- ✓ 郵便局の西側の辺に馬券売場がありその先に競馬場が広がっていた。馬券売場は 7 つぐらいの窓口があった。競馬場と観客席の間にはパドックもあったと思う。
- ✓ 競馬場は板囲いをして入れないようにしてあった。

- ✓ どこから来たのであろう予想屋がいたことを覚えている。当時、益田競馬と交互にやっていた。益田競馬がこの前まで続いていたことが驚きである。
- ✓ 戦後も 2~3 回やったと思うが、戦前の方が華やかであったという。



- ・ 現在の三井旅館の裏手には厩舎があった。
- ・ 菊萬の前の辺りには現在の綾ビルのところ馬の入浴場があった。コンクリートの浴槽があり、スロープで馬が入浴できるようになっていた。戦前に内田氏も、その入浴場で馬の背中を流す光景を見たことがあるという。

☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ ここで特筆すべきは馬浴場の出現である。競馬場の東端あたりに作られ、会社は古鉄管で温泉を送った。
- ・ この皆生競馬は、春夏二回各三日ずつ開催された。昭和 12 年まで開催された後、戦争で一時中断し、戦後昭和 22 年と 23 年に二回開催されたがその後廃止となったという。
- ・ 昭和の初期、本格的な競馬場がこの皆生温泉にあり、チンチン電車に乗って多くの人が詰めかけていたとはなんだか不思議な感じである。今は多くの人を癒している皆生温泉であるが、その昔は馬も癒す場所だったとは驚きである。

< 皆生温泉大正ロマン >

☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ 明治も末年近くになって、米子町西倉吉町の雑賀源太郎氏が温泉経営にのりだした。海岸の松林の手前あたりに、こわ葺の長屋を建てて民宿まがいの湯治場とし長生館と号した。
- ・ 皆生温泉が産声を上げたころの旅館の姿が描かれている。大正 11 年 6 月有本氏が温泉開発を始めてから最初に建った旅館が大山館と静養館であった。そして同年 7 月に開業したのが日の出館であった。
- ・ 昭和の初期までこの三つの旅館が皆生温泉で最も繁盛していたようだ。

☑ 伝承者 松浦茂氏：

- ✓ 昭和 10 年頃、大山館、静養館、日の出館が大きな取引先であった。とにかく大口の注文であったため納品は馬車で行っていった。
 - ✓ 馬車は、今で言う運送屋さんが持っていた。皆生にはそのような商売をされている方が 1~2 名いたと思う。お願いすると大八車や馬車で荷物を運んでくれた。米子からお酒を仕入れるときもお願いしていた。
 - ・ 当時、米子から皆生まで荷物が届くのに 1 週間ぐらいかかったという。当時はのんびりとしたもので、旅館からの注文があってから 3 日ぐらいで納品すれば上できであった。もちろん催促などもなかったという。
 - ・ 先日まで当時(昭和 4 年頃)の毛筆の売掛帳が残っており酒一升瓶一本 95 銭であった。残念ながらその売掛帳は捨ててしまったという。
 - ・ 大正 14 年に開業したのが今では伝説的な存在となっている「山陰パラダイス」である
 - ・ 四条通りの突き当たりでできたパラダイスは、温泉浴場“滝の湯”をはじめプール、子ども遊技場、休憩広間、貸室、食堂、売店などそなえた高級娯楽センターであった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉開発 60 周年誌：「皆生今昔」
- ✓ パラダイス - 旧約聖書でアダムとイブの住んでいたというエデンの園にあやかっただけのものだ。キャッチフレーズは「山陰唯一楽園地」

- ・ 温泉公園が庶民の憩いの場であるとするならば、パラダイスは少しハイカラなテーマパークといったところだったのかもしれない。昭和 4 年の火災により廃業したというが、すでに当時のことを覚えている人は少なくなっている。

昭和初期 パラダイス
写真提供 藤田収康氏



- ・ 昭和 2 年 10 月皆生温泉東部の松林の中に有本松太郎氏により造営されたのが皆生温泉神社である。祭られているのは、貴布禰神(きふねしん)と大国主命(おおくにぬしのみこと)であり、米子市車尾の貴布禰神社の分祀である。
- ・ 大正 9 年に描かれた「皆生温泉都市計画設計図」にもほぼ同じ場所に神社が描かれており、有本氏には皆生温泉開発当初からこの地に神社を建立する思いがあった。
- ・ 皆生温泉神社の御利益は、病氣平癒・健康長寿・安産子宝であるという。
- ・ 苦しいときの神頼みではないが、皆生温泉の生みの親である有本松太郎氏の功績を振り返るとともに、有本氏の思いが残されているこの神社をもう一度見直してみることも必要であるように感じる。
- ・ 大山の大神山神社も、皆生温泉神社も同じ大国主命が祀られている。伯耆のものがたりとして何かのきっかけにならないだろうか。

< 皆生温泉と戦争 >

- ・ 昭和 12 年 7 月、日華事変が勃発し戦時色が強まっていった。昭和 12 年 11 月皆生温泉に陸軍の転地療養所が開設され、その本部が静養館に置かれた。戦地で傷ついた傷病兵たちが帰還して、傷の手当をする施設であった。
- ・ 皆生温泉の各旅館に分泊し、傷病兵たちは傷を癒した。戦時下であり一般のお客様はほとんどいない状況の中であったが、皆生温泉は活気づいていた。地元の婦人会なども挙って手伝いに借り出されていた。

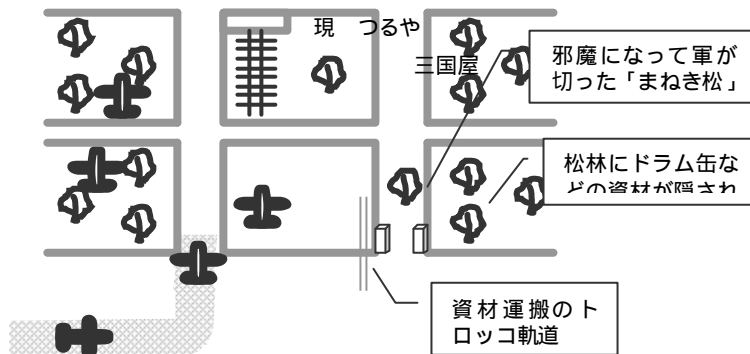
☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 母親も静養館にいた傷病兵の世話にでていた。静養館の 100 畳の間が兵隊さんでいっぱいになっていた。人手が足りず近くの人たちが手伝っていた。傷病兵を慰問するため婦人会を中心にお茶会や運動会なども行っていた。
- ・ 当時は、戦時中とはいえまだ少し余裕のある時代であったと語る。その後、戦局が進み厳しい時代となっていった。
- ・ 昭和 13 年 3 月に姫路陸軍病院皆生臨時分院が皆生温泉の東部に完成した。
- ・ 陸軍病院は、戦後昭和 21 年 4 月に国立米子病院となり、昭和 46 年 7 月車尾に新築移転するまで皆生にあった。当時、多くの旅館が軍の関係する施設へと変わっていった

- ・ 昭和 12 年 7 月米子市両三柳に米子国際飛行場が開かれた。この飛行場と皆生温泉は大きな関わりを持つこととなる。

☑ 伝承者 藤田収康氏：

- ✓ 昭和 19 ~ 20 年頃、伝承者は小学校の 5 ~ 6 年生であった。男手が戦争にいてるために小学校高学年は勉強せずに手伝っていた。
- ✓ 三柳の飛行場から両三柳道路、皆生通りを通して皆生まで飛行機を押して運んできた。信用金庫さんや皆生つるやさんの辺りに飛行機がたくさん止まっていた。
- ✓ 見通しの良い両三柳の空港で修理すると攻撃されてしまう。そこで皆生の松林に隠して飛行機を修理したという。



- ・ 当時は戦局がかなり悪化しており、傷ついた兵隊を本国に帰す余裕はなかったようだ。大山荘が衣替えした荘丁健民鍛錬所などで兵士を鍛えて戦地に送り込んでいた。馬を癒し、傷病兵を癒した皆生温泉は、飛行機の傷ついた翼をも癒す場所となった。
- ・ 三柳の飛行場ができた翌年に軍の命により、皆生電車が撤収されている。このようなことを想定して撤収命令がでたのかもしれない。これも皆生温泉の運命だったのだろうか。

5. 高度成長とともに発展した皆生温泉

<高度成長と観光ブーム>

- ・ 昭和 30 年前後より皆生温泉には続々と新しい旅館が建設されていくこととなる。日本が高度成長へと向かう流れに呼応しており、その後皆生温泉は急速な発展を遂げるものとなる。
 - ✓ 昭和 28 年 松露園（内田浅子）開業
 - ✓ 昭和 29 年 ひさご家（松本好野） うらく荘（内田保秀）開業
 - ✓ 昭和 30 年 白扇（福本文子）開業
 - ✓ 昭和 31 年 幸楽園（安田定義）開業
 - ✓ 昭和 32 年 司旅館（港花子） みくに家（松本照子） 松風閣別館（織田かめの）開業
 - ✓ 昭和 33 年 生駒（岡本鹿子）開業
 - ✓ そして、皆生温泉の一大拠点となった皆生温泉ヘルスランドが昭和 34 年にオープンすることとなる。

- ・ その後、皆生温泉の旅館は、近代的な設備を導入することとなる。
 - ✓ 昭和 36 年 清風荘が皆生温泉で初めて鉄筋コンクリート建てに改装した。
 - ✓ 昭和 39 年 東光園が 8 階建ての高層建築の旅館として生まれ変わった。当時、この二つの旅館が皆生温泉をリードする存在であった。
 - ✓ 昭和 42 年 皆生グランドホテル（伊坂定吉）の開業へとつながる。

- ・ 当時のことを皆生シーサイドホテル（旧司旅館）の社長は振り返る。
 - ☑ 伝承者 港紀一郎氏：
 - ✓ 淀江で港屋という料亭をやっていた。その頃、淀江や安来は米子の奥座敷ということで多くの料亭や旅館があった。淀江で細々と料亭をやっているのはダメだとの思いから、昭和 31 年 12 月の忘年会シーズンにあわせて司旅館をオープンさせた。
 - ✓ 当時、小学校の 5 年生であったが、開業に向けてどたばたしていたことを覚えている。旅館は、女将であった母親が切り盛りしていた。
 - ✓ 開業当時、宴会には必ず芸妓さんが入り夜の 12 時～1 時まで延々と続き、片づけると 3 時～4 時となることも良くあった。
 - ✓ 皆生温泉の街には、いたるところで芸妓さんの声が溢れていた。

- ・ 当時皆生温泉の知名度はまだ低かった。遠くの方から来られる方は少なかった。やはり三朝、玉造は一流であったとかたる。
- ・ 30～40 年代の団体旅行ブームになると遠方から宿泊客が詰めかけるようになり、鉄道を利用して新見や高梁など岡山県方面からのお客様があった。
- ・ しかし、まだまだ皆生温泉は日帰り客が多く、玉造温泉が独占していた出雲大社参りのお客様を是非とも取り込みたかった。当時、旅行情報の発信地は国鉄であり、お客様の国鉄ブランドへの信頼は厚かった。皆生温泉は国鉄との結びつきを強めて発展していった。

< 皆生温泉とお客様の足 >

- ・ 皆生温泉の玄関口である米子駅は山陰鉄道発祥の地であり、古くから交通の拠点として栄えた。
- ・ 当時、岡山からの出雲大社参拝する臨時列車がワンシーズン 60～80 本でいた。玉造温泉が 95%、残りの 5%が三朝温泉に泊まるものであった。この頃の皆生温泉はまだ知名度が低く、老舗温泉地である玉造や三朝には及ばない状況であった。
- ・ 特に皆生温泉は冬場のお客様が少なく、どうしても出雲大社参拝のお客様がとりこみなかった。

☒ 伝承者 岩佐甲子郎氏：

- ✓ 米子鉄道管理局の旅客課の紹介で岡山の駅へ交渉に出かけた。
- ✓ 交渉はうまくいったのであるが、歓迎会をするという条件が付いた。玉造温泉では、お客様を歓迎するために安来節などを見せる歓迎会を行っており、皆生温泉でも同様の歓迎会をすることが条件となった。その頃完成した米子市公会堂（昭和 38 年完成）で盛大な歓迎会をして観光客を迎えることとした。

- ・ このような努力により、出雲大社参拝ツアーを玉造温泉と皆生温泉がほぼ半分半分を分け合うところまで漕ぎ着け、皆生温泉の名前も徐々に浸透してきた。
- ・ 昭和 39 年米子空港に東京便が就航し、山陰地方にも高速交通の波が押し寄せてきた。東京オリンピックの開催や東海道新幹線の開業など旅行の広域化が一気に進んだ。

☒ 伝承者 岩佐甲子郎氏：

- ✓ その頃、有名な温泉地としては、北陸、南紀、山陰であった。北陸は、新潟・富山・福井で北陸観光協会を作っており、組織的に観光振興を図っていた。南紀は、和歌山だけであったがお金を持っていた。
- ✓ それに比べ山陰は各温泉地が独自に集客を考えており、広域観光の時代に取り残されてしまうと考えた。そこで、玉造温泉に呼びかけて賛同を受け、三朝温泉にも声を掛けて山陰を広域で売り出すための山陰三名湯会ができた。
- ✓ 企画を提案した皆生温泉が事務局を持つこととなった。

- ・ 昭和 39 年 6 月に第一陣として東京へ宣伝活動に向かった

☒ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」

- ✓ 東京ではサンケイホールを貸し切り、はじめに宣伝隊の PR、そして山陰民謡と踊りを紹介して、最後に封切りの洋画の上映で幕を閉じた。
- ✓ 洋画の人気もあってか大ホールも超満員の盛況であった。一行は翌日、東京、横浜、千葉と旅行業者を訪問し、米子 - 東京便の開設の宣伝と送客の依頼をして歩いた。

- ・ これが皆生温泉の広域観光への取り組みのはじまりであり、以降 24 年間関東をはじめ関西、九州などへ山陰の魅力をアピールして歩いた。現在、広域観光の重要性が叫ばれる中、約 40 年前から広域観光に注目していたことに驚きを感じる。
- ・ 昭和 47 年東京から新幹線が岡山へ開通し、国鉄による団体旅行が全盛を迎えた。
- ・ その頃の様子を清風荘の社長である森社氏は語る。

☑ 伝承者 森博道氏：

- ✓ 業者から電話がかかってきたとき半年前からでは遅いですよとよく言ったものだ。
 - ✓ 列車の切符が取れず、切符さえあればいくらでもお客様は待っている状況であった。
 - ✓ 大手業者に対してはキャラバン隊を出して直接訪問した。未処理のカルテが山積みとなっており条件の良い団体を選んでいた状態であった。
- ・ 昭和 45 年の大阪万博を境にマイカーのお客様が増え、モータリゼーションの波が押し寄せる。団体旅行もバス旅行が主流となり、皆生温泉の旅館各社も拳ってバス会社へと営業を行った。
 - ・ その後時代は進み、団体旅行から家族旅行・小グループによる旅行へと様変わりし、交通手段もマイカーへと変わっていった。消費者の志向も歓楽型の男性型消費から文化体験を重視する女性型消費へと変わっていった。しかし、成り立ちが歓楽型の皆生温泉にとって、消費者の変化への対応が遅れ、少し時代から取り残された感がある。

< 住民参加の町づくり >

- ・ 昭和 42 年の夏から行われるようになったのが皆生温泉まつりである。昭和 39 年皆生競馬場跡地にできた海浜公園を会場に盛大に行われた。公園に仮設の舞台を組み、民謡のど自慢、安来節保存会による安来節の披露や検番のきれいどころによる豪華な踊りなどが披露された。地元の人々はもちろん観光客まで飛び入りでお祭りを盛り上げたという。その後、地区の恒例行事として引き継がれていくこととなった。
- ・ 昭和 50 年代に入り地域全体で皆生温泉を盛り上げようとする気運が高まってきた。旅館、商店、住民などが一緒になって皆生温泉の活性化を考える皆生温泉推進協議会が設立された。その協議により生まれたのが、いで湯太鼓、子ども御輿である。
- ・ 当時、旅館組合の事務局長をしていた松田氏にその時の様子を聞くと。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 住民参加型の街づくりに向けて皆生温泉まつりの活性化が検討された。
 - ✓ いで湯太鼓を始めるために和太鼓を購入した。子ども御輿を数百万円かけて新調し、皆生音頭の踊りも始めた。現在の観光センターが建っているところで打ち上げをしたことを覚えている。皆生が一体となったという意味では推進協議会の取り組みは間違っていなかったと思う。
- ・ いで湯太鼓は、若手に運営を任せられ太鼓連が結成された。その中には、若手の芸妓も参加していた。
 - ・ 芸妓として太鼓連に参加していた元芸妓の美河氏によると。

☑ 伝承者 美河氏：

- ✓ 皆生温泉まつりのイベントとして「いで湯太鼓」を披露した。おもちゃ姉さん、なつこさん、ひろみさんなど芸妓が 7 人ぐらい参加していたと思う。サラシを巻き、法被を羽織り、頭には鉢巻きを巻いて。
- ✓ 男衆は地元の住民が中心であったと思う。清風荘まへの海岸でお客様へ披露した。一泊二日で見に来てくれたお客様もいて、その夜はお座敷に呼ばれた。

< 芸妓が行き交う粋な町 “ 皆生 ” >

- ・ 昭和 28 年 楽坂はん子の歌う皆生小唄がヒットし、皆生温泉は一躍全国に知られることとなった。一般家庭にテレビが普及するようになった昭和 35 年皆生温泉を舞台としたNHK連続ドラマ「チョコちゃん日記」が放映された。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」
 - ✓ 幸楽園、ひさご家を舞台にしたホームドラマで、一年間続いた人気番組であった。ロケは 3 日間で行われ、市内から見学者が押し寄せた。
- ・ このようにして全国的に有名となった皆生温泉であるが、昔の皆生温泉でイメージするのは芸妓さんの姿ではないだろうか。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」
 - ✓ 皆生温泉の場合は、お色気によって観光客にも地元にも人気があった。
 - ✓ 宴会にはきれいどころが必要で、客の需要に応え、しだいにその数を増していった。最盛期には芸妓の数が 180 人にも及び、山陰の熱海とさえ言われた。
- ・ 芸妓は、踊りや小唄などのお稽古をして芸や作法を磨いている。そんな芸妓さんは、みんな高いプライドを持っていた。皆生温泉内を移動するのも必ずタクシーを使っていた。そのため皆生には、多くのタクシー会社が営業所を構えていたが、全盛期にはとてもタクシーが足りない状況であったようだ。
- ☑ 伝承者 美河氏：
 - ✓ 置屋には、10 人ぐらいの芸妓が所属していた。置屋の中で人間関係が厳しくお姉さん方からいろいろと指導を受けた。毎日のようにお稽古に励んだ。宴席の中でお客様を楽しませる技を磨いた。
 - ✓ お客様も宴席の作法を知らないと遊べない。若い従業員は会社の飲み会で宴席での遊び方を学んだ。芸妓のおどりが終わるまでは絶対に動かない。社長が絶対的な存在で、芸妓さんが社長にお酌をするまでは他の社員はお酌ができなかった。
 - ✓ 宴が進み幹事の合図で初めてお酌ができた。
- ・ 当時、温泉旅館と芸妓は切っても切れない関係にあり、芸妓が手配できなければ旅館の営業ができない状態であった。
- ☑ 伝承者 森博道氏：
 - ✓ 昭和 40～50 年代にかけ当時の菊水旅館(現在菊萬)前の通りがメイン通りであり、浴衣姿のお客様とお座敷に向かう芸妓さんなどでごった返しすれ違うこともできないほどであった。芸妓さんは番傘に、巾着を持ち、日本髪をゆって、カランコロンとゲタをならしながら歩いていた。大変風情があり皆生温泉の名物でもあった。
- ・ 昭和 47 年のオイルショックの頃からお客様が激減してきた。また、カラオケの普及により芸妓が邪魔になったことも芸妓の減少に拍車をかけたという。
- ・ その後、コンパニオンが隆盛となってきてお座敷の数が激減し、今では皆生温泉の芸妓も数えるばかりとなっている。

< 皆生温泉あれこれ >

= 水族館 =

- ・ 皆生温泉には、その昔水族館があった。昭和 32 年オープンしたその水族館は、三条通りに面した現在の皆生つるやさんの北側に位置していた。
- ・ 当時、設備も、ノウハウもない状況の中でかなりの苦勞があった。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：

- ✓ 美保関から魚を買い付けたが、専用の運搬器具がないためトラックに水槽を積み込んで運んだ。夏場は水槽の水の温度が上がるため、安藤氷店から氷を買い水槽に浮かべたが、大量の魚が死にその処分に多くの時間を費やした。
- ・ 亀が網にかかると漁師から譲り受け飼育したこともあった。
- ・ 亀を越冬させることはできず、時期が来るとお酒を飲ませ海へ帰してあげた。海へ返す時に各メディアからの取材を受けて話題となった。
- ・ 飼育設備の整っていないことに加え、素人が管理に当たっていたことから限界があり昭和 40 年に閉館となった。間瀬氏は、当時のことを振り返り、現在の飼育設備があれば、また状況は違っていたのではないかと語る。
- ・ 皆生温泉は、海から湯が湧く温泉として有名であり、また目の前に海が広がるロケーションから海のイメージがとても強い。これまで紹介してきたように長年海との戦いを続けてきた皆生の人々にとっては「海=敵」のイメージが少なからずあるように感じる。
- ・ 海との戦いに一応の終止符が打たれた今、弱みであった海との関わりを一転して強みに変えていく取組も必要である。

= 皆生温泉と海上交通 =

- ・ 皆生温泉では、海を使った交通網の整備に取り組んだことがある。昭和 47 年日本道路公団により境水道大橋が完成し、古くから関係の深かった境港と対岸の美保関町が橋によってつながった。そのため境港～大根島～松江、米子～大根島～馬潟～松江などの航路を持ち、通勤や通学の足として利用されてきた航路が廃しに追い込まれた。
- ・ そこで、浮上してきた計画が皆生温泉と美保関間を結ぶ航路であった。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：「皆生温泉・湯けむり裏ばなし」

- ✓ 皆生海岸は砂浜で接岸が困難ではないかとの不安があったが、運輸局の許可を得て、試験運行となった。初日には旅館の従業員が 50 人ほど試乗した。心配された足場も道板のみで乗船できた。まずまずのスタートであったが、二度目の試乗会では若干の波もあったため、女性が足場を踏み外し海へ転落した。
- ✓ 安全性の面から浮き桟橋が必要と判断され、その後航路の話は消滅していった。
- ・ 昭和 40 年代後半、隠岐島が本格的な観光誘致活動を行い、隠岐島への観光が注目を集めてきた。広域観光の観点からも隠岐からの航路を確保することは大きなメリットとなる。皆生温泉と隠岐西ノ島町を高速フォークラフトで結ぶ計画が浮上した。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：

- ✓ 昭和 50 年頃、瀬戸内海で就航しているフォークラフトで皆生と西ノ島町を約 30 分でつなく計画であった。皆生温泉から隠岐までの日帰り観光が可能となる。
 - ✓ 隠岐への回路を皮切りに、東は鳥取砂丘、西は島根半島、日御碕、浜田、また、米子港、宍道湖までの観光遊覧なども構想にあった。三菱重工の担当者と打ち合わせを重ね運行管理については三菱重工側が行うことで基本的な合意ができていた。
 - ✓ しかし、運営の受け皿となる会社を設立する必要があり、その調整が付かず計画は立ち消えとなった。
-
- ・ 伝承者の出身地は隠岐西ノ島町であり、この計画には一方ならない思い入れがあったようである。今でもいつの日か皆生温泉に海路ができることを望んでおられるようだ。
 - ・ 皆生温泉は、米子からも少し離れており、公共交通機関の便は決してよくない。もし皆生温泉を起点とした海上交通網が整備されれば、その様相は一転するはずである。海上交通の技術も以前とは格段に進歩しているはずであり、今後の取組に期待がもたれる。

6. スポーツと健康を切り口とした皆生温泉

<トライアスロン誕生の秘話>

- ・ 皆生温泉開発 50 周年記念事業の一環として企画されたのがこのトライアスロンであった。当時、日本ではトライアスロンという名前すら知られていなかった。
- ・ 皆生温泉旅館組合の事務局長であった松田氏が当時を振り返る。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 昭和 56 年春頃から皆生温泉旅館組合の開発委員会で 50 周年事業について検討を重ねてきた。なかなか決まらず困っていた。委員であった白扇の福本専務が週刊誌にハワイで行われたトライアスロン大会の特集を見つけて検討することになった。

- ・ 事務局長であった松田氏が調査することとなったが、何せ全く資料がなかった。新聞のコラムでハワイのトライアスロンに出場した熊本の医師堤先生の記事を見つけ、わらをもつかむ思いで連絡を取った。事情を話すと快く協力をいただけ、発案者の福本氏、東光園の石尾氏、松田氏の 3 人で九州へ赴いた。
- ・ そして、ハワイ大会の様子を聞き、皆生大会への夢を膨らませた。
- ・ 正式にトライアスロン皆生大会を開催することが決まり、準備を始めたのだが、これからが大変だったという。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 一番苦労したのが警察との交渉であった。
- ✓ 堤先生からの話をそのまま警察で話したが。分からないものが、分からない人に話すのでなかなか意が通じない。結局、理解が得られないまま時が流れた。

- ・ とにかく関係する機関が多岐に渡るため交渉には時間がかかった。特に、自転車のコースが一番広域にまたがりことが分かり関係する市町村の役場を一つずつまわった。
- ・ 水泳競技には、海を使うため海上保安庁や漁協との交渉を行った。そして、最後まで残ったのが警察との交渉であった。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ なんべんも足を運んだが結局国道 9 号線を横断することは、認められなかった。横断歩道を横切ることも許されなかった。そこで、大山の山麓から自転車をスタートさせたり、国道を迂回して日野川の河原におりるコースを考え出した。

- ・ 水泳コースの選定にも様々な苦労があった。水泳競技は、当初現在のように海岸線を境港方面に進み折り返し地点をまわってくるコースが採用されていたようであるが、2 回目と 3 回目だけは沖に向かって泳いでいき折り返すコースもあった。
- ・ 当時、水泳部の副部長をしていた柴野憲史氏は振り返る。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 海岸線沿いに泳いでいくコースを選んだ。
- ✓ 2.5 km の距離を車のメーターを使って測ったことを覚えている。学生時代水泳部に所属していた伝承者は、そのコースを試しに泳いだ。水泳には、自信があったがかなり大変であり所要時間は一時間以上かかると思っていた。

- ・ いよいよ大会当日の朝がやってきた。お世話になった堤先生をはじめ 56 名の参加者により、日本でのトライアスロンの歴史が始まった。最初は予算もなく宣伝活動もできなかったが、堤先生が熊本からたくさんの選手を連れてきてくれた、また第一回大会の優勝者となった高石ともや氏は招待選手ではなく一般選手として参加した。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 早朝、水泳のスタートに行ってみたところ、風で横断幕が倒れており慌ててなおしたことを覚えている。午前 7 時に河合米子市長のピストルの号砲でレースが始まる予定であったが、肝心のピストルが見えない。銃砲店の店主を探したが混乱した会場内を探すことができなかった。
- ✓ そこで、近くで工事をしていた住友建設の工事事務所に駆け込み、笛を借りて、ようやくスタートの時を迎えることができた。当時、河合市長はかなりの高齢であったため、ピストルの号砲とはほど遠い「ピリピリ〜」という笛の音でスタートした。元気良くスタートを切りたかった選手やスタッフには少し拍子抜けであった。

- ・ これが記念すべき日本のトライアスロン発祥の一齣である

- ・ 無事スタートを切ってホットしたのもつかの間、20 分ほどで水泳競技を終えた選手が帰ってきてしまった。最低一時間ぐらいかかると予定して準備をしていたスタッフを慌てさせた。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 先頭の選手はアメリカの選手で、五輪の代表候補に挙がっていたような選手であった。水泳のゴールの準備も、自転車コースの案内もまだできてない状況であった。

- ・ 当時、警備上の問題があり自転車のスタートまで車で選手を運ぶ段取りになっていた。水泳でゴールした選手を何人か集めて移動するため、トップでゴールした選手をかなり待たせることになった。その上、二台用意していた移動用の車が違う道を走ったため、後から水泳をゴールした選手が自転車で先にスタートするハプニングがあり、そのアメリカの選手はかなり立腹していたようだ。
- ・ 当時の混乱ぶりを象徴するようなエピソードである。

- ・ 初めてのトライアスロンの大会は、いろいろな人の心に深く残っているようである

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ とにかく言い尽くせないような思いで準備に取り組んだ。
- ✓ しかし、今振り返ってみるとやってみれば何とかなるものだと感じる。本気でやろうとすることが大事だ。
- ✓ すべてのことが心に残っている。とにかく選手たちにけがのないように、事故のないように願っていた。自分の人生の大きな一ページである。

- ・ 実際のこの後日本各地でトライアスロンの大会が始まったが、大きな事故を起こして多くの大会が中止に追い込まれたという。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 高石ともやさんがもう一人の選手と一緒にゴールを切り、初めての優勝者となった。閉会式の交流会の場で、優勝者である高石ともやさんがギターを片手に歌を披露してくれたときは、会場にいたスタッフや選手たちは皆感動した。短時間でいろいろなハードルを乗り越えてきた達成感と選手たちの盛り上がりで大変心を打たれた。
- ✓ 当時のことを思うと、楽しみながら取り組んだからできたのだと思う。みんな初めてのことで、暗中模索で準備を進めた。地元の人にも協力してもらいながらやっと実施にこぎ着けた。我ながらすごいことをやったと感じている。

- ・ トライアスロンを皆生温泉の地に誕生させた人々の話を聞いていると、開拓者精神が感じられる。これは、有本松太郎氏が100年前に思い描いた夢と相通じるものがあるように私には思える。
- ・ 何事にも夢を持ち立ち向かっていけば、大きな仕事ができることを彼らは実践した。

< トライアスロン皆生大会 25年の歩み >

- ・ トライアスロンを始めるのも大変な苦労があったが、それを続けていくのも大変な苦労があった。回を重ねる度に認知されるようになり、警察などからの国道の使用許可ももらえるようになった。協力いただけるボランティアの数も年々増えていった。大会関係者が一番頭を痛めたのは出場者の健康管理であった。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 労災病院と連携して緊急時の受け入れ態勢を整えた。西部消防も積極的に協力してくれ救急車を待機させてくれた。熊本大学からも選手たちの身体を研究するために医療チームが駆けつけ、選手たちの健康チェックに一役をかってくれた。

- ・ 出場する選手たちにもいろいろな思いがあったようだ。第三回大会から出場して現在では大会のスタッフとして運営に当たっている柴野氏が当時のことを振り返る。

☑ 伝承者 柴野清氏：

- ✓ 当時、沖に向かう1.5 kmを泳ぐ往復のコースであった。下見のときに沖に浮かぶ折り返しの印が見えず恐怖を覚えた。その恐怖感で前日は一睡もできなかった。
- ✓ 当日、水泳と自転車は順調に終えるが、マラソンになり前日の睡眠不足がたたり睡魔に襲われた。目標を定めて目を閉じたままで走るような状況であった。

- ・ 当時はまだ競技用の自転車も一般的ではなくママチャリのような自転車で出場する人もいた。現在のようにエードステーションが完備されておらず、行けども、行けども飲み物にありつけないような状況であったという。
- ・ 住民の認知度も低く「あんたやちゃんにしとるの」と声をかけられたり、トラックの運転手から「乗っていけよ！」といわれる始末であった。

- ・ 第三回大会で大きな事故があった。皆生トライアスロンの功労者であった堤先生が水泳競技中に溺れるという事故が起こった。コースの設定から大会の運営まで堤先生から直接指導を受けた松田氏は当時のことを振り返る。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ トライアスロンは本人がリタイヤするまで係員は手を出せないのが原則である。水泳競技の係員もずっと側にいたようであるが残念な結果に終わった。
- ✓ 自転車コースで事故の一報を聞き、急いで現場に駆けつけた。
- ✓ 皆生トライアスロンの生みの親である堤先生がこのようなことになり大変心を痛めた。
- ✓ その後、沖へ向かう水泳コースは、海岸沿いに泳ぐコースとなったという。

<皆生トライアスロンが生んだ名選手>

- ・ このような歴史を重ね続けてきたトライアスロン皆生大会であるが、その間いろいろな名選手を生んでいる。最も輝かしい成績を残した地元の星は、小原巧選手ではないだろうか。学生時代水球の選手であった彼は、皆生温泉のプールで指導者をするかたわらトライアスロンのトレーニングに励んだ。

☑ 伝承者 柴野清氏：

- ✓ 彼は 10 回大会ぐらいから出場したと思う。水泳は得意であったが、バイクが少し苦手であり、バイクの練習に大山の方まで連れていったこともあった。

- ・ 皆生大会を足がかりに全国にデビューした小原選手であったが、トライアスロンの第一人者としてトライアスロン界を引っ張っていく選手に成長した。1999 年の W 杯コナ大会で 10 位、アジア選手権 4 位となって世界のトップ選手となった。
- ・ トライアスロンが初めて正式種目となった 2000 年シドニーオリンピックでは、日本代表として活躍した。メダルの期待がかかった小原選手は、53 人中 21 位と日本人出場 3 選手の中で最も早くゴールを切った。
- ・ 現在指導者としても日本のトライアスロン界を支えている小原選手であるが、昨年行われた 24 回大会に凱旋出場し、みごと総合優勝をはたした。

- ・ このトライアスロンは、皆生温泉の旅館を中心に始まったものであるが、今や鳥取県西部地区を代表するイベントにまで成長した。トライアスリートたちからは、「日本トライアスロン発祥の地」であるこの皆生大会は人気が高いという。

- ・ 発祥の地と言うだけでなく、多くのボランティアが運営する地元の手作りの大会であることやフィニッシャーロードの感動が忘れられず毎年参加している選手も少なくない。トライアスロンを陰で支え続けた米子市観光協会事務局長の野嶋譲氏は語る。

☑ 伝承者 野嶋譲氏：

- ✓ トライアスロンの開催は、年一回三日間であるが毎年 400～500 人が皆生に来ることになる。関係者を含めると 20 年間で数万人が皆生を訪れたことになる。
- ✓ 彼らは皆生温泉に多くの思いを持っているはずである。開催期間中のみならず皆生温泉を利用してもらうような取り組みが必要である。

- ・ 皆生温泉にとってトライアスロンは大きな宝である。どこの大会が大きくなるうとも「日本で初めてトライアスロンを始めた」という冠は付けられない。また、25年もの間続いてきたことも一つの大きな歴史である。
- ・ 現在、トライアスロンのない残り362日皆生温泉にはトライアスロンを思わせる仕組みはほとんどない。トライアスロンの像が遊歩道にひっそりと立っているくらいであり、トライアスロンの躍動感や感動を伝えるものではない。

☑ 伝承者 野島譲氏：

- ✓ トライアスロンを通年型の観光資源として活かしていくことが必要である。
- ✓ フィニッシャーロードを整備して観光のポイントとすることもいいであろう。

- ・ 皆生温泉は、健康を切り口にした将来像を描いているが、トライアスロンは打ってつけの物語である。お金をかけて観光資源を新しく創るのもいいが、今ある観光資源を有効に活かしていくことが求められているのではないだろうか。

< 根強い人気にあるグランドゴルフ >

- ・ グランドゴルフは、昭和57年鳥取県泊村で考案されたオリジナルスポーツであり、高齢者を中心に大変人気のあるスポーツとなった。
- ・ 現在、全国各地で大会が行われており、2000人を越える参加者を迎えている大会もある。そのグランドゴルフの発祥の地が鳥取県である。泊村では、毎年グランドゴルフ発祥地大会が開かれている。

- ・ 皆生温泉でもかなり早い時期からグランドゴルフが普及していた。
- ・ 地元の愛好者が中心となって皆生温泉公園の空き地をグランドゴルフ場にした。土地を米子市から借り受け、コースの管理はすべて地元の人が行う。広いコースを自分たちで芝刈り、散水、草取りを行い、常に整備が行き届いており、管理される方の苦勞が伺える。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ グランドゴルフ人口は年々増えている。よく歩くので年寄り向けにはもってこいのスポーツである。しかし、あれだけのスペースでは大会が開催できない。

- ・ 皆生温泉の土地柄もあり、グランドゴルフ愛好者の中にも、旅館の関係者が多い。せっかく整備しているグランドゴルフ場を温泉の活性化に役立てようという気持ちが伝わってくる。グランドゴルフは、手軽に、誰でも楽しめるスポーツである。
- ・ 皆生温泉にとっても、健康を切り口とするコンセプトにあった観光資源であり、街づくりの計画に盛り込んでいくと面白いのではないだろうか。

< 皆生温泉 100 年の歴史を振り返って >

- ・ 「海に湯が湧き一世紀」その皆生温泉の歴史は海との戦いから始まった。多くの先人が夢を抱き、そして夢半ばにして挫折していった。新興の皆生温泉にとって玉造や三朝などの老舗温泉街は大きなライバルであり、追いつけ追い越せと懸命な努力を繰り返し、今の皆生温泉の基礎を作り上げた。
- ・ また、トライアスロンを開催するため一致団結して一つのことに取りかかる情熱には感動すら覚える。まさに開拓者精神を思わせる歴史である。

- ・ この 100 年間、住民、行政機関、温泉旅館そして温泉会社と一緒に皆生温泉の活性化に取り組んできた。しかし、ここに来て少しその絆が希薄になっていることを感じる。皆生シーサイドホテルの社長である港氏は、私見として次のように語る。

☑ 伝承者 港紀一郎氏：

- ✓ 先人の遺業はすばらしいものだと思う。100 年前の都市計画は、もっと評価すべきではないかと思う。出来上がったものを引き継ぐのは簡単なこと。
- ✓ テトラポットの存在も大きい。もしなければ今の旅館はなかったのだろう。
- ・ 今まで、長年皆生温泉の振興にたずさわってきた港氏は、街づくりの大切さを痛感しているという。
 - ✓ 今いろいろ取り組んでいるのだが、個人的にはもっと大きな目線で皆生温泉の将来を見据えた取り組みが必要だと思う。50 年 100 年先を見据えながら皆生温泉の基盤を整えていくことをする。
 - ✓ 何をキーワードにするのか？
 - ✓ 何をコンセプトにするのか？
 - ✓ みんなの目線を合わせていく必要がある。時間がかかるかも知れないが大事なことであり、行政や地元と協力しながら進めていく必要がある。
- ・ 皆生温泉の今後のあり方について
 - ✓ 強烈なリーダーシップが必要である。「足して、二で割る」ような発想ではやっていけない。各旅館で集客ができる時代は終わった。
 - ✓ 地域全体で集客する時代であり、皆生の個性をいかに全国発信していくのが勝負になってくる。

- ・ 50 年近くの間、皆生温泉の振興に関わってきた間瀬氏が皆生温泉の今後についてこう締めくくった。

☑ 伝承者 間瀬庄作氏：

- ✓ 皆生温泉の振興については大同団結が不可欠である。
- ✓ 総論賛成各論反対の繰り返しでは皆生温泉の発展は望めない。
- ✓ 皆生温泉への思いはつきないが、今回の伝承を皆生温泉の振興に是非活かして欲しい。